建通新聞　2013年7月31日（水）

（1）　第7571号　　＜昭和55年6月18日第三種郵便物認可＞

インフラの町医者をめざして

全9回の7

第8回建設トップランナーフォーラムより

第4部「老朽化から社会インフラを守る」では、「知床におけるエゾシカ事業」と題して斜里建設工業（北海道）の土田好起氏、「岐阜県メンテナンスエキスパート」と題して丸ス産業（岐阜県）の加藤十良氏、「青森県橋梁アセットへの取り組み」と題して中網組（青森県）の羽賀義広氏が事例発表した。

自然と共存して地域貢献

土田社長

◇　◇

世界自然遺産の北海道知床で建設業を営む斜里建設工業（斜里町）の土田好起社長は「地元観光協会やNPO法人からの感謝状が最もうれしい」と笑みをこぼした。

同社は観光道路である知床峠の除雪を請け負い、プランド品の「知床エゾシカ肉」を東京都内のレストランに販売する。いずれも自然との共存と地域への貢献が根底にある。

油圧ショベルで雪道を切り開く知床峠の除雪は春の風物詩。毎年5月のゴールデンウイークに間に合わせようと延長10㌔を1・5カ月掛けて開通させる。高度なテクニックが必要な重機の操縦にGPS施工システムを導入したが、今春は季節外れの雪が降り開通が6月1日と大幅に遅れた。

エゾシカの食肉加工は、激増の一途をたどり農作物を食い荒らす害獣対策として認知されている。土田社長は「自然に逆らわず、知床に根付いた業者として役割を果たしていきたい」と力強く語った。

MEは予防保全の専門家

加藤取締役部長

◇　◇

岐阜県は、増大する社会資本のメンテナンスに向け、岐阜大学と共同で維持管理を担う専門家として「社会基盤メンテナンスエキスパート（ME）」を養成している。県内に170人いるこのMEは、道路を利用するボランティアである「岐阜県メンテナンスサポーター（MS）」と連携して県内の道路を守る取り組みを始めている。

丸ス産業（岐阜県白川町）には2人のMEが認定されている。加藤十良工務部取締役部長は、MEに求められている役割について、「予防保全のエキスパートであり、ゼネラリストの視点を持ったスペシャリストであるべき」と強調する。

さらに、社会資本の町医者であるためには「顧客中心主義を実践し、ネットワークを駆使して仕事をすることが大切」とした上で、「そこで得た情報に会社組織の力を結集することが、公益的な責任は果たすことになる」と話す。

『橋守』こそが橋の町医者

羽賀社長

◇　◇

青森県では、2005年度に橋梁アセットマネジメントアクションプランを策定し、06年度から運用を始めた。県では、橋梁の長寿命化には日常的な維持管理が最も効果的との観点から、日常点検や清掃、維持工事、緊急措置、小規模工事、追跡調査などをまとめて簡易公募型プロポーザルで施工者を特定。中網組は、06年度から8年連続で上北地域県民局管内の橋梁維持工事を受注している。

同社の羽賀義広社長は「点検やメンテナンスを前提とした橋づくりや技術開発が重要」と話す。また長寿命化しても一橋そのものの寿命があるため、安全・安心な橋梁の判断基準が課題になるだろう」と指摘する。

羽賀社長は「包括業務により自分たちが橋を守る『橋守』という責任感が生まれ、やりがいを強く感じている。熟練した橋の町医者としての力を発揮できるように社を挙げて取り組みたい」と決意を新たにする。

（「地方建設記者の会」取材班）